

P-007

園の分野別リーダー(保健・食育)にとって「手洗いの難しさ」を知ることの意義

三浦 由美

小田原短期大学 食物栄養学科・乳幼児研究所

【背景・目的】

食中毒を始めとする感染症(感染経路)対策としてのゴールドスタンダードは「手洗い」であることは言うまでもない。しかしながら、園の職員研修「食中毒」対策のリーダーを務める栄養士(管理栄養士)や、子ども環境の衛生管理や子どもに向けての安全教育である保健活動(手洗い教室)を行う保育者は、学生時代に習った保健等の教科書レベル知識だけでは、園で預かった子どもの命や健康を守れないことを、研究者は、園の分野別リーダーを育成する多くの「保育士等キャリアアップセミナー」の中で、自身の以下の実験結果を通し、手洗後であっても清潔と過信してはいけない事、食べ物を取り扱う際は、必ずグローブの着用が大事である事を教えている。

- ①手洗いに慣れていない者は、むしろ手洗いによってむしろ菌が増えてしまうこと
 - ②手洗い時間が長い(60秒)、2回手洗い(10秒手洗いを2回)といった煩雑な方法では、菌が増える傾向にある
 - ③手洗いにおける除菌率と増加率の観点から、妥当な手洗い時間は教科書どおり30秒(ハッピーバースデイを2回歌う長さ)である
 - ④手洗いで増加した菌は常在菌(表皮ブドウ球菌・黄色ブドウ球菌)であり、食中毒の原因菌の1つが増えている
- そこで今回新たに、研究者のゼミナールに所属する将来園等の栄養士志望の学生を対象に、手洗い食毒後の効果を検証し、分野別リーダーの対策活動の1資料をつくることを目的とした。

【方法】

ゼミナール生計24名を対象に、A石鹸手洗い30秒とBアルコール消毒(3.0ml)のみの2つの条件に分け、それぞれの一般細菌および黄色ブドウ球菌数から手洗い効果をグローブジュース法より検証した。

【結果・考察】

菌培養に成功した19名の全体結果より、菌が増えてしまった者は19名中12名と多く、手洗い消毒前の一般細菌数および黄色ブドウ球菌数の平均の値は、それぞれ 1.7×10^5 CFU、 3.4×10^4 CFUであり、手洗い消毒後のそれは 4.7×10^5 、 9.8×10^4 とどちらも増加を示した。いかに手洗い消毒によって、皮膚下の常在菌が手の表面にでてきやすいのか今回の実験をもっても確認することができた。このことは、手洗いやアルコール消毒が必ずしも感染症の万全な策ではないことが伺えた。学会発表の場では、条件の違いによる効果をお示しする。

P-008

生活習慣を整えると夜間の授乳回数は減るのか-生後4ヵ月と7ヵ月時の乳児健診時間診データを用いた検証-

清水 悦子、岡邨しのぶ

1茨城キリスト教大学

2NPO法人赤ちゃんの眠り研究所

【目的】

夜間の授乳回数が多いと母親の睡眠は分断されることによる育児負担の増加が懸念される。本研究は、夜間の授乳回数が生活習慣を整えるための養育行動の有無と関連するか、また、その関連に月齢による差異があるかを明らかにすることを目的とし実施した。

【方法】

茨城県某市内で2016年1月1日から2017年12月31日の間に生まれた子ども496人の4~5ヵ月と7~8ヵ月の乳児健診時の問診データを解析対象とした。分析はまず、一元配置分散分析により授乳形態(母乳・混合・ミルク)により夜間覚醒回数が異なることを確認した。次に、夜間の授乳回数を従属変数とし、生活習慣を整えるための養育行動「朝7時まで起こしているか」、「夜9時まで寝かせているか」、「夜はすべての電気を消しているか」、「毎日散歩を行っているか」を独立変数とした重回帰分析を、授乳形態別に生後4ヵ月、7ヵ月のそれぞれにおこなった。なお本研究は茨城キリスト教大学倫理審査委員会の承認を受け実施した。

【結果】

欠損を除く466件(生後4ヵ月)および479件(生後7ヵ月)が解析対象となった。生後4ヵ月、7ヵ月ともに、ミルク授乳が他の授乳形態より児の夜間の授乳回数が有意に少なく、7ヵ月では混合授乳がもっとも夜間授乳が多かった。重回帰分析の結果、生後4ヵ月時点では、混合授乳の「夜9時まで寝かせる」習慣で有意に夜間授乳回数が多い結果となった。また生後7ヵ月時点では、混合授乳の「朝7時まで起こす」習慣がある場合に夜間授乳が有意に少なく、ミルク授乳では「夜9時まで寝かせる」習慣で夜間授乳が有意に多い結果となった。

【結論】

朝起こすという養育行動が夜間授乳回数を減らす可能性について、生後7ヵ月の混合授乳でのみ示されたが、その有用性については児の睡眠の質も含めた介入研究等による検証が必要である。